—論文—

高岡短期大学紀要　第9巻　平成9年3月
Bull.Takaoka National College, Vol.9, March 1997

視点人物のwonder
—*Daisy Miller*の冒頭における様々な出会い—

入　江　識　元

（平成8年10月31日受理）

要　旨

この論文の目的は，Henry Jamesの代表的な中編*Daisy Miller*の冒頭を分析し，Jamesのこの作品における視点人物の特徴について考察することである。Jamesのこの作品におけるもくろみは，視点人物の二元論的な視点を通じて，様々な「問いかけ」を設定することにある。アメリカからの若い離脱者Winterbourneは，二項対立的な視点からDaisyの反復的な行動を観察する。彼の判断の材料はDaisyの顔やtoneである。そして，彼の判断の及ばないような彼女の常に変化している部分に当惑し，これを合理化し，彼女を彼にとって理解可能な人間像に作り上げる。Daisyを疎外するのは，ヨーロッパの風景や閉鎖的な社交界のみならず，利己的なWinterbourne自身の視点なのである。Winterbourneの視点はこの作品を通じて成長することはない。この作品は常にヨーロッパ娘をstudyし続ける彼で始まり，終わるのである。しかしながら，この作品において重要なのは，そうしたプロットそのものにあるのではなく，Jamesの全ての作品に特徴的な，視点人物の「問いかけ」であり，反復的な行為の中で視点人物がどのようにwonderを増幅させてゆくか，という点にあるのだ。

キーワード

問いかけ，二項対立，二元論，視点或いは視線，顔，トーン，

1　イントロダクション

Daisy Miller（1878）はHenry Jamesをいちやく有名にした中編小説であり，彼の作品の重要な特徴である「国際テーマ」と「心理的リアリズム」を前もって予示した文学史上のcanonとして一般に浸透している。ところでこの「心理的」という言葉は大変重要な意味を持っている。なぜなら「心理的」という用語は「認識論的」という意味であり，「存在論的」という用語と対で用いられるはずだからである。Jamesにおけるリアリズムは，「存在論的な」実在ではなく，出来事の受容者である個人の眼を通して認識された実在であり，そこで，登場人物の視点の置き方が問題になってくるのである。

「視点人物」の設定はJamesの作品を論じる際によく問われる問題である。「視点人物」の設定でJamesがもくろんだのは，秘密とその隠匿に関わることである。ある秘密と関わり，それに対し，視点人物が絶えず「問いかけ」を繰り返すこと。これがJamesの作品の一つのポイントとなっている。

James研究に存在するいわゆる「国際テー

総合基礎グループ

マ」という用語。これは*Daisy Miller*においてはJamesの他の作品と同様にアメリカ対ヨーロッパの二項対立である。しかし，もしこの二項対立がこの作品の意図するところの全てであるとするなら，なぜ第1部が夏のスイスであり，第2部が冬のイタリアなのだろう。Jamesは*Daisy Miller*を発表する三年ほど前の1875年に永住の意を固めてヨーロッパへ渡った。そして，死の前年の1915年にはイギリスに帰化している。この事実と，彼の作品の内容を考え合わせれば，Jamesの策略はむしろ，アメリカから「離脱」した青年の視線そのものにあったのではないか，ということは容易に想像できる。

ヨーロッパにいるアメリカ人や，アメリカにいるヨーロッパ人，すなわち「場違いな」設定にいる人種を登場人物として描くことの効果は二つある。一つは，秘密の増幅であり，今一つは人種を一度外すことである。秘密の増幅とは，視点人物のWinterbourneが，長くスイスに住み慣れているため母国アメリカの性質を失っているだろうという憶測によって，アメリカ女性のDaisy Millerに対し異常なまでに秘密と憶測を増幅させるということである。人種を外すということも秘密の増幅に関わることであるが，自然や風俗や言語といったものが，「場違いな」人種，つまりforeignerに対する秘密の生成に加担するのである。

この論文において筆者は，この作品全体を通して見るのではなく，あくまで冒頭に固執し，必要があれば作品の他の部分に言及する，といった態度を一貫してとることにする。なぜなら，視点人物の視線の特徴が最も表れているのは，この作品では冒頭の部分であり，他の登場人物との冒頭での出会いが本論文のテーマにとって重要な鍵を握るからである。

2 弁証法的な視線

2.1 夏と冬，生と死，二項対立的設定

この作品は二部に分かれている。そしてそれぞれの設定は，夏のヴェヴェーと冬のローマであり，あたかも二項対立を読者に促すかのようである。冬といえば，主人公であり，視点人物であるWinterbourneの名前はwinter＋bourneというように，冬のイメージを読者に与える。ちなみに，bourneには「境界」「領土」の意味の他に，スコットランドや北イングランドでは「小川」や「細流」を意味する。一方，Daisyのほうは文字通りヒナギクなどキク科の総称であり，はつらつとしたイメージを連想させる。ちなみに花言葉は「無垢(innocence)」「平和(peace)」「希望(hope)」という，まことにDaisyのイメージに相応しいものである。ところが，このdaisyにはそのイメージに相反する意味も含まれている。count the daisies, push up the daisies, under the daisiesなどの成句は，キクが故人に供えられる花のイメージから，「死」の意味を提示する。これはDaisyの死という結末を連想させるに充分な意味付けではあるが，このエロスとタナトゥスを同時に持つdaisyという名称は，読者にとって不可解なDaisyの分裂的性格を表すに恰好の名称でもあるわけである。

これとは少し異なるが，Alfred KazinはJamesの*Bostonians*(1886)の一節を巡って，次のような見解を示している。

> James himself saw Boston as winter, his beloved Europe as the very perfection of summer.*1

ここに見られるのは，America対Europeとwinter対summerの二項対立である。Jamesはアメリカをwinterのイメージで，またヨーロッパをsummerのイメージで捉えているが，これは彼の作品における特徴の一つと言える。ところで，Winterbourneはアメリカからのexileであり，Daisyは生粋のアメリカ娘であるから，Kazinの見解とは明らかに異なる。このあたりにJamesのこの作品での特徴が見られ

る。つまり，America＝winter対Europe＝summerという二項対立ではなく，アメリカからのexile，ヨーロッパのアメリカ人，スイスの夏やローマの冬におけるヨーロッパ的な背景といった，アメリカとヨーロッパの微分的な結合が見られるのである。

冒頭のナレーションで，アメリカ人が多くなる6月頃になるとヴェヴェーはアメリカの海水浴場のcharacteristicを呈してくる，とある。

> In this region, in the month of June, American travellers are extremely numerous; it may be said, indeed, that Vevay assumes at this period some of the characteristics of an American watering-place. There are sights and sounds which evoke a vision, an echo, of Newport and Saratoga....You receive an impression of these things at the excellent inn of the "Trois Couronnes," and are transported in fancy to the Ocean House or to Congress Hall.*2

Trois Couronnesの旅館にいると，NewportやSaratogaの旅館にいるようなfancyを覚える。ここで提示されるのは，ヨーロッパの典型的な町のアメリカ化である。夏はヨーロッパ対アメリカの二項対立を崩す季節であり，アメリカ人がアメリカ人のままでヨーロッパ社会の中に溶け込める季節である。

しかしそのすぐ後でこのような但し書きがつく。

> But at the "Trois Couronnes," it must be added, there are other features that are much at variance with these suggestions: neat German waiters, who look like secretaries of legation; Russian princesses sitting in the garden; little Polish boys walking about, held by the hand, with their governors; a view of the sunny crest of the Dent du Midi and the picturesque towers of the Castle of Chillon.*3

前述の錯覚と矛盾する，つけ加えるべき特徴がいくつかあるということ。この特徴とはGerman waiterや，Russian Princessesや，little Polish boysのことであり，或いはDent du Midiの山頂やthe Castle of Chillonのpicturesqueな塔の風景である。この但し書きは，直前の文とは明らかに異質である。ここにはアメリカ人と相容れないものがヨーロッパに存在するのだ，という示唆がある。picturesqueはイタリア語のpittorescoに由来する語であり，ヨーロッパ的な絵画の風景をイメージするものである。このことからも，ヨーロッパの典型的な風景がアメリカ人をヨーロッパから区分けし排除することがわかるだろう。

前述の，winter対summer，アメリカ対ヨーロッパの着眼から見れば，夏はアメリカ人をヨーロッパに馴染ませる季節，すなわちforeignerがforeignerでなくなる季節であり，この対応から考えれば，冬はforeignerがforeignerとして扱われる季節であるから，夏のヴェヴェーにおいて自由活発なDaisyが冬のローマで死ぬという筋書きは的を射ていると言える。重要なのは，アメリカ＝winter，ヨーロッパ＝summerの対応ではないということだ。さらに，上の引用の但し書きで物語るのは，夏はforeignerを歓待しているように見せかけ，ヨーロッパの排他性を隠蔽する季節だということであり，従って，反対に冬はその排他性を露呈する季節だ，ということが類推できるのである。

2.2 視点或いは視線の設定

冒頭の場面は，今から（この物語が語られている時から）二，三年前，夏の朝，Trois Couronnesの庭での設定である。Winterbourneは前日にジュネーヴからやってきた。

I hardly know whether it was the analogies or the differences that were uppermost in the mind of a young American,...*4

Winterbourneの心にあるアメリカとヴェヴェーの類似と相違の問題。類似と相違は相対立する概念のように思われるが，実は同じ一つの立場をとっているにすぎない。二元論，或いは弁証法という立場である。Winterbourneの眼差しは二元論的である。それはこのような風景を分析する場合のみならず，Daisyを分析する場合においても同じである。

ところで，Winderbourneに言及する場合，youngとAmericanの語を用いて形容するのはなぜだろうか。これは視点（視線）の設定を考える場合重要なことである。

Winterbourneという視点人物の設定は27歳位の若いアメリカ人。この「若さ」が彼の視点に影響を与え得ることは言うまでもないだろう。

...when his friends spoke of him, they usually said that he was at Geneva "studying." When his enemies spoke of his, they said—but, after all, he had no enemies;*5

彼の友人が用いるstudyという用語。ちなみにこの小説は，studyingで始まり，studyingで終わる(a report that he is "studying" hard,*6)。また，この作品の副題は"A Study"である。これは通常「習作」と解され，そう訳される。だがこのstudyをこの作品のキーワードと捉えることも可能である。つまり若いアメリカ人青年のstudyの物語として捉える，ということである*7。

What I should say is, simply, that when certain persons spoke of him they affirmed that the reason of his spending so much time at Geneva was that he was extremely devoted to a lady who lived there—a foreign lady—a person older than himself. Very few Americans—indeed I think none—had ever seen this lady, about whom there were some singular stories.*8

この引用でわかるのは，彼には夢中になっている年上の外国人女性がいるということ。すなわち彼にとってのstudyとはforeign ladyをstudyすることだということである。ところでforeignとはどの国に属する者のことか。Americanという語が別に用いられていることから，ヨーロッパ系の女性を指しているのではないかと推測はつく。このforeignという語は弁証法的である。なぜならそれは，常に内部と外部を規定するからである。実はこの差別的なforeignの意味が作品の流れで次第に変化していることに気が付く。冒頭ではforeignはEuropeを指すが，排他的なヨーロッパの社交界では，foreignとは生粋のアメリカ人であり，foreign ladyとはDaisyのことなのである。

3 顔すなわち現象—「何が起こったのか」

3.1 隠　匿

何であれ「優れた」ものと称される文学における技巧を問題にする際我々にとって重要なのは，真実そのものに拘わる技巧よりも，真実を隠匿する技巧なのだ。フォルマリストたちはこれを「異化作用」という呼び名で表現したが，文学における隠匿とは，事実を歪めて劇的にすることではなく，読者に提示する秘密を増幅させることなのである。少なくとも，Jamesにとってはそうである。

WinterbourneがDaisyを始め全てのキャラクターの顔を読むシーンがよく見られる。顔は表象であり，しかも絶えず分節化を繰り返す表象である。ポーカーフェイスという言葉があるが，顔とは存在論的と同様心理的な意

味において隠匿の道具であり，精神の発露として表情が機能する，という神話があるからこそ，この身体上極めて個性的で目立つ道具がカムフラージュとして機能するのである。シニフィアンとしての顔と，シニフィエとしての想念，イデオロギー。二者の間のズレは現代哲学理論においてすでに語り尽くされたところであるが，Jamesにとって顔とは，見せかけとしての顔であるばかりでなく，それ自体が常に変化する表象であり，顔というテキストを読む行為は，それ自体分節化に対する挑戦的な行為であるわけだ。Jamesは肖像画と画家を好む。それは例えばフーコーがベラスケスの絵に対して行った実験のようなものであり*9，Jamesの作品で言えば，*The Liar*(1888)における視点人物の肖像画画家が良い例である。

3.2 wonderとembarrassment
―女性への生成変化

wonderという語は視点人物の生成変化のキーワードである。Daisyの表情の無変化はWinterbourneのwonderを増幅させる。

> "He's an American man !" cried Randolph, in his little hard voice. The young lady gave no heed to this announcement, but looked straight at her brother. "Well, I guess you had better be quiet," she simply observed.*10

この人はアメリカ人だよ，と言う子供の言葉に何の注意も払わず，静かにしたら，とたしなめるDaisy。おしゃべりであるにも関わらずWinterbourneに関心を寄せない素振りを見せる彼女一流の意図的な態度は，Winterbourneのstudy欲を増進させるに充分である。また，ジュネーヴでは，「ある稀な場合(under certain rarely occurring conditions)」以外は，若い男は若い未婚の女性と自由に話せなかった。実はこのしきたりが，二人の間にフィルターを作り，会話を曖昧にするのに一役買っている。また，Daisyには男性に対して次のような行動パターンがある。

> This pretty American girl, however, on hearing Winterbourne's observation, simply glanced at him; she then turned her head and looked over the parapet, at the lake and the opposite mountains.*11

一瞥するだけで，そっぽを向いて風景を眺めるDaisy。この反復的なゼスチュアで彼のwonderは掻きたてられるのである。

> He wondered whether he had gone too far;*12

ここで注意したいのは，「～だろうか」のwhetherの存在である。この接続詞には共時的意味がある。そして，実際，ラスト近くのwhetherは「～だろうとなかろうと」の意味にかわるのである。"I believe that it makes very little difference whether you are engaged or not !"*13これはすなわち，常にwonderを発し続けるWinterbourneがDaisyに対するwonderを解除し，生成変化を放棄し，いわば「見捨てる」ことの文法的な表れでもある。

さて，今一度出会いの頃のDaisyに戻り，彼女の反復的な行動に焦点を当ててみる。

> The young girl glanced over the front of her dress, and smoothed out a knot or two of ribbon. Then she rested her eyes upon the prospect again....The young lady glanced at him again....And she said nothing more.*14

またglanceとsmootheの反復である。Jamesの描く行為の反復は何を表すのだろう。読者

がこの反復から読みとるのは，初対面の男性に対する女性の行動規範がDaisyの中にできあがっているということである。つまり，社交的な女性は初対面のgentlemanに対してこのように行動するのだ，という規範である。これが実際のヨーロッパ社交界における伝統的な規範ではなく，Daisyがただ自分の中に思い描いている規範であることは，この規範がWinterbourneとGiovanelli以外に受け入れられていないことからも明らかである。否，実はこの二人にのみ受け入れられているということが問題なのだ。いずれにせよ，この引用でわかるのは，Winterbourneが彼女のこの行為に困惑(embarrassed)している，つまり，彼の若さ故に彼女の罠にかかっているということである。彼は彼女の態度の一瞬一瞬に気持ちが揺らぐ。つまりWinterbourneにおける心の分節化であり生成変化である。これは例えば，*Bartleby*における，Bartlebyを前にしたときの視点人物である弁護士の気持ちと同様である*15。

さて，Daisyのこの反復が効果的に用いられている別の場面を見てみる。

> The young lady inspected her flounces and smoothed her ribbons again; and Winterbourne presently risked an observation upon the beauty of the view. He was ceasing to be embarrassed, for he had begun to perceive that she was not in the least embarrassed herself. There had not been the slightest alteration in her charming complexion; she was evidently neither offended nor fluttered. If she looked another way when he spoke to her, and seemed not particularly to hear him, this was simply her habit, her manner.*16

またもやリボンをさわるDaisy。そこで，今度は風景を眺める行動パターンを読者は予想するわけだが，実際にはWinterbourneが代わりを演じ，Daisyの代わりに彼が風景の美しさを指摘した。つまり，WinterbourneはDaisyのパターンを把握したわけである。このことからも，Daisyの行動の反復は，Winterbourneを引き込むための意図的な反復であることがわかる。

この引用の後半でわかるのは，Winterbourneがwonderとperceiveを繰り返すことによってモノを認識する人間であり，知覚に頼る人間だということである。ここで，彼女が「困惑」しないのを「知覚(perceive)」してembarrassmentが止む彼に対し，ローマにおいては，彼女が「困惑」しないのに対し，彼は「困惑」することになる。また，「顔色(complexion)」で判断するのも彼の「知覚」の特徴であり，「無変化」な彼女に対し，「変化」が彼の特徴である。引用最後の「彼女の習慣，やり方(her habit, her manner)」について言及するなら，スイスやローマの「習慣(custom)」を破るのが彼女の「やり方(manner)」である。

さて，彼が風景を指さして説明していくうちに，彼女のglanceが彼へと向けられ始める。

> ...this glance was perfectly direct and unshrinking. It was not, however, what would have been called an immodest glance, for the young girl's eyes were singularly honest and fresh. They were wonderfully pretty eyes; and, indeed, Winterbourne had not seen for a long time anything prettier than his fair countrywoman's various features—her complexion, her nose, her ears, her teeth. He had a great relish for feminine beauty; he was addicted to observing and analyzing it; and as regards this young lady's face he made several observations. It was not at all insipid; but it was not exactly expressive;

and though it was eminently delicate, Winterbourne mentally accused it—very forgivingly—of a want of finish.*17

Winterbourneの女性美に関する「観察」と「分析」は，complexion*18によるものが大きい。彼女の顔に関する彼の「観察」の結果は，「特徴の無い，活気の無い(insipid)」「表情に富む(expressive)とは言えない」「繊細だが完全さに欠ける(a want of finish)」というように，とても美的とは言い難い形容である。ではなぜ彼はDaisyに惹かれたのだろうか。或いは本当に惹かれていたのだろうか。

She was very quiet; she sat in a charming, tranquil attitude, but her lips and eyes were constantly moving. She had a soft, slender, agreeable voice, and her tone was decidedly sociable.*19

自分のhistoryを語るDaisy。無変化なはずの彼女が「常に変化している(constantly moving)」。彼は常に客観的な観察の対象として彼女を観察し分析する。そして，彼の分析には，彼自身の持つ二元論的な視線が用いられる。その二元論的な観察結果が上の引用であった。ところが，無表情で活気のない顔の背後に，常に変化し続ける彼女が存在する。彼の二元論的な分析を裏切る彼女の行動に彼は興味を持ったのである。二元論的な分析が裏切られること，それは生成変化の動機にもなる。

3.3 子供への生成変化

Randolphとの出会いはこの作品にとってどういう意味を持つのであろう。彼は初対面の際，Daisyとの仲介役を果たしている。an urchin of nine or tenとは，彼に対するWinterbourneの最初の描写である。urchinとは，いたずらっ子，わんぱく小僧，針ネズミ（hedgehog）（時々針ネズミに化ける小鬼(elf)）と説明される。ではさらに彼に対する描写を見てみる。

The child, who was diminutive for his years, had aged expression of countenance, a pale complexion, and sharp little features.*20

年のわりに小柄で，年をとった表情，青白い顔色，sharpな容貌。Winterbourneを見る「一対の聡明かつ透過する小さな眼(a pair of bright, penetrating little eyes)」。これは大人をpenetrateする子供の眼である（*The Turn of the Screw*(1898)の子供の眼を思い出して欲しい)。

"Will you give me a lump of sugar ?" he asked, in a sharp, hard little voice—a voice immature, and yet, somehow, not young.*21

成熟していないが，幼くない，sharpでhardな声。これは決して幼くはない，世間慣れした人間として彼が見なされるべきであることを示唆している。

"Oh, Blazes; it's har-r-d !" he exclaimed, pronouncing the adjective in a peculiar manner. Winterbourne had immediately perceived that he might have the honour of claiming him as a fellow countryman. "Take care you don't hurt your teeth," he said, paternally.*22

子供の妙な発音で自分と同じアメリカ人と「知覚する」Winterbourne。彼はこの子供に父親のように接するが，彼らの会話には特徴的なところがある。

Winterbourne was much amused. "If you eat three lumps of sugar, your mother will certainly slap you," he said. "She's got to give me some candy, then," rejoined his young interlocutor. "I can't get any candy here-any American candy. American candy's the best candy."*23

ここで，interlocutorとは，文語で「対話者」の意味であるが，minstrel showのなかで黒人に扮した司会者という共時的意味を持つ*24。それは楽団員の列の中央でアナウンサー役をして，両端の芸人とユーモラスな掛合をする司会者のことである。つまりJamesは二人の掛合漫才を設定しているのだ。アメリカの流行り物である演芸を通じて，Winterbourneは子供への生成変化を開始する。相手の台詞尻を捕まえてオオム返しに会話をしながら，Winterbourneは次第にRandlphの観察へと向かう。

Winterbourne wondered if he himself had been like this in his infancy, for he had been brought to Europe at about this age.*25

Winterbourneはこの子供の歳の頃，ヨーロッパに連れてこられた。そこで，彼は自分の幼少の頃とRandlphの様子を重ね合わせる。そこで子供に対するwonderである。つまりWinterbourneは子供に対し生成変化を開始するのである。

4 二元論的tone

4.1 tone

toneはこの作品のキーワードである。作中において登場人物，特にDaisyとWinterbourneはtoneで様々な状況を判断する。

最初にこのキーワードが見られるのはcourier Eugenioの登場においてである。

"Mademoiselle has made arrangements ?" he added in a tone which struck Winterbourne as very impertinent. Eugenio's tone apparently threw, even to Miss Miller's own apprehension, a slightly ironical light upon the young girl's situation. She turned to Winterbourne, blushing a little—a very little.*26

sharplyにWinterbourneを見るEugenio。このimpertinentなtoneをDaisyも感じとる。これは無変化のDaisyが見せる初めての変化である。このエピソードでわかるのは，ironyのかけらもないDaisyが，ironyを感じとると変化を生じるということである。従僕であるはずのEugenioのoffenceとimputationは，例えば，*The Turn of the Screw*のQuintを連想させる。また，その後の様々なエピソードから，Daisyとの性的関係も匂わせているようである。

次に，伯母のMr. Costelloのtoneを読みとる場面を見てみる。

And her picture of the minutely hierarchical constitution of the society of that city... was...almost oppressively striking. He immediately perceived, from her tone, that Miss Daisy Miller's place in the social scale was low.*27

伯母のtoneからデイジーの社交的地位をperceiveするWinterbourne。彼の認識の源は言葉ではなく言葉の周辺，雰囲気にあることが，この引用から見て取れる。

"I was telling Mr. Winterbourne," the young girl went on; and to the young man's ear her tone might have indicated that she had been uttering his name all her life.*28

Winterbourneの判断の手がかりは目と耳である。その中でtoneは耳に訴えかけるものである。そして，Daisyは知り合ったばかりの男の名前を親しげに呼んでいるように思わせる声のtoneを持つ女とも言える。彼女はinnocentであると同時に，無意識のうちに，確実に女なのである。

4.2 society

Daisyは様々な場面でsocietyという用語を連発する。

> she was looking at Winterbourne with all her prettiness in her lively eyes and in her light, slightly monotonous smile. "I have always had a great deal of gentlemen's society."*29

これを聞いて戸惑いながらも魅せられるWinterbourne。彼女の口頭によるexpressionはexpressiveでない表情とは正反対であからさまである。Daisyはあくまで男性の社交界にこだわるが，Daisyのこだわるsocietyはforeignerを排除する性質を備えているし，その結果Daisyは疎外されることになる。

Daisyを疎外するのはヨーロッパの社交界だけではない。ヨーロッパ全体のtoneがすでにDaisyを排除する存在であり，それに慣れ親しんだアメリカからの「離脱者」であるWinterbourneもまた，Daisyを疎外し排除する存在になるのだ。

> He felt that he had lived at Geneva so long that he had lost a good deal; he had become dishabituated to the American tone.*30

ジュネーヴに居すぎたために失われたものがアメリカ人のtoneである，というこの一文は，toneという語がキーワードであるが故に重要である。Winterbourneはtoneで全てを知覚する人間である。アメリカのtoneを失ったということは，対応関係からヨーロッパ的なtoneを身につけてしまった，ということを意味する。それ故 "...had he encountered a young American girl of so pronounced a type as this."*31というように，WinterbourneはDaisyをtype化して見ようとするヨーロッパ的な視点を持ってしまっているのである。

ところで，Daisyの性質に戸惑うWinterbourneを描写する一文に次のようなものがある。

> Winterbourne had lost his instinct in this matter, and his reason could not help him.*32

本能と理性。相反するものだが，本能を失い，理性は役に立たないとはどういうことなのだろう。魅力的だが，このようなきっぱりした，決然たる態度の社交的な女性に会ったこと。Winterbourneは，女のことについては本能を失い，理性も役に立たない若者なのだ。彼女はinnocentに見えるが，flirtsであると考えたい。なぜならDaisyがflirtsであるなら，彼女を彼の観察と分析で究めることができるからである。自分の理解できるcategoryにおさめたがるWinterbourne。彼の視線は利己的である。そしてこの彼の弁証法的，二元論的視線は，彼女を追い詰めることになるのである。

> Winterbourne was almost grateful for having found the formula that applied to Miss Daisy Miller.*33

公式と公式の応用。formulaとは，ヨーロッパ的な排他的視点を身につけてしまったWinterbourneの思考パターンを端的に表す用語である。この数学的思考を裏付ける用語は，微分とは対極の位置にある二元論的な思

考を意味する。

また，次のような一節もある。

> It was impossible to regard her as a perfectly well-conducted young lady; she was wanting in a certain indispensable delicacy. It would therefore simplify matters greatly to be able to treat her as the object of one of those sentiments which are called by romancers "lawless passion." That she should seem to wish to get rid of him would help him to think more lightly of her, and to be able to think more lightly of her would make her much less perplexing. But Daisy, on this occasion, continued to present herself as an inscrutable combination of audacity and innocence.*34

弁証法的なWinterbourneの推論をここでも見ることができる。Daisyを何とか自分の理解し得る範疇におこうとする彼の思考パターンがここでも見られるのであるが，この場合は数学的ではなく文学的である。ところでWinterbourneはなぜロマンス作家に言及したのだろう。ロマンス作家，或いはロマンスというジャンルの用語で定義づけるということ。ここに見られるのは英国の伝統的なロマンスのジャンルと現代的両義性に基づく概念の対立である*35。彼はアメリカ娘Daisyを伝統的なジャンルで評価しようとしている。だが彼女は両義的存在であり，混沌とした新しい時代の感覚を予感させる存在である。この引用で見ても，両者のズレが決定的であることがわかるのである。

5 結論—中短編小説としての *Daisy Miller*

中短編小説の問題提起はおよそ一つに集約される。すなわち「何が起こったのか。」という問いかけを常に発することである。小話はこれと対極に位置し，「これから何が起きるのか」を問題とし，常に読者に緊張を与えながら，これから何かが起こるし，行為が行われる。長編小説の場合は折衷的であり，これら中短編小説と小話の要素を取り入れながら，時間の持続の中で，常に現在の軸で何かが起こり，何かが行われるようになっている。

さて，これまで見てきたように，視点人物WinterbourneはDaisyについてwonderを抱く。すなわち「何が彼女に起こったのか」。しかし，この作品について「WinterbourneはDaisyの死を境にどのような成長を遂げたのであろうか」などという愚問を投げかけてはならないだろう。なぜなら，Winterbourneは初めも終わりも変わらないのだから。彼はアメリカ娘との出会いの前も後も，ヨーロッパ娘をstudyすることに従事しているのだ。もし，James自身の意図があるとすればそれはプロットとしての結末よりももっと別のところに存在するだろう。Jamesの作品の特徴は視点人物の眼から問いかけをし，反復的な行為の中で秘密を，視点人物のwonderを増幅させてゆくことにある。この作品の中ではとりわけ顔を問いかけの対象とし，toneを知覚の根拠としながら，Jamesは，若い青年という実験的な視点を用いて，読者に何かを提示しながら，何かを隠し通したのだ。優れた作品は何であれ，常に隠し通すことに意味がある。推理小説は初めから犯人がわかっているか，或いは最後に犯人がわかる仕掛けになっている。いずれにせよ，犯人がわかること，理解されることが作品の結論なのだ。ルポルタージュであれば，目的は何かを明らかにすることであろう。だが，Jamesの書きたかったのは推理小説でもルポルタージュでもない（Poeですらそうである*36）。絶えず問いかけを繰り返すこと，そして隠し通すことが彼の意図であり，やり方なのである。

注

＊1 Kazin, Alfred, *A Writer's America: Landscape in Literature*, Alfred A. Knopf: New York, 1988, p.129

＊2 James, Henry, *Daisy Miller: A Study in Tales of Art and Life*, Union College Press: New York, 1984, p.44

＊3 *ibid*., pp.44-45

＊4 *ibid*., p.45

＊5 *ibid*., p.45

＊6 *ibid*., p.97

＊7 このような読み替えは，実はあらゆる文学作品において可能である。例えば，Herman Melvilleに*Bartleby*という中編があるが，これの副題はA Scribnerである。Melvilleは当時これを匿名で雑誌に発表したが，どうやら彼はこの中編を作り話としてではなく，ノンフィクションとして読者に読ませる意図を持っていたらしい。そこで副題を「ある書記官」として，あたかもBartlebyを実在する人物であるかのように見せかけた。このように副題とはしばしば読者をペテンにかけるための一つの手段として用いられるのである。

＊8 James, *op. cit*., p.45

＊9 フーコー(Foucault, Michel)，『言葉と物－人文科学の考古学』渡辺一民・佐々木明訳，新潮社，1974，pp.27-41

＊10 James, *op. cit*., p.47

＊11 *ibid*., p.48

＊12 *ibid*., p.48

＊13 *ibid*., p.94

＊14 *ibid*., p.48

＊15 Melvilleの*Bartleby*については，従来，外界からの働きかけをいっさい拒絶するBartlebyの態度に焦点が当てられがちであるが，語り手である弁護士の「私」の物語として捉え直すこともできる。視点人物である「私」は，弁護士という公平さを重んじるべき職に就いているにも関わらず，視点は利己的であり，歪んでいる。そしてその視点は，Bartlebyのような自分の理解を超える者を前にする際に狼狽し，最も利己的になるのだ。Winterbourneの視点もまさにこれであり，Melvilleにおけるdead-wallを連想させるようなDaisyの態度に直面し，彼の視点は狼狽し利己的になるのである。

＊16 James, *op. cit*., pp.48-49

＊17 *ibid*., p.49

＊18 complexionについては*Webster's Third New International Dictionary*(Merriam-Webster Inc., 1993)によれば，"1)bodily constitution or mental makeup, 2)a cast of mind: an individual complex of attitudes, inclinations, or ways of thinking or feeling, 3)the hue or appearance of the skin esp. of the face, the skin of the face, 4)the appearance or impression of a person or thing"とあり，顔が，内面的不可視的な部分を映し出す表象であると捉えられていることがわかる。

＊19 James, *op. cit*., p.51

＊20 *ibid*., p.45

＊21 *ibid*., p.46

＊22 *ibid*., p.46

＊23 *ibid*., p.46

＊24 *Webster*によれば，interlocutorは“a man in the middle of the line in a minstrel show who questions the end men and acts as leader”とあり，minstrelについては“one of a troupe of musical performers and comedians of a kind originating early in the 19th century in the U.S. and typically giving a program of Negro melodies, jokes, and impersonations and usu. blacked in imitation of Negroes”とある。また，『ランダムハウス英和大事典第2版』（小学館，1994）によれば，minstrel showとは，「黒人に扮した司会者と芸人たちが演じる，おどけた対話と歌曲，舞踊から成るミュージカル演芸；19世紀に米国で広まった。[1870，米；1824年ごろEdwin P. Christy がBuffalo市で始めた一座の名the Christy Minstrelsにちなむ]」という説明があり，*Daisy Miller*が書かれた当時，こういった種類の演芸がアメリカの代表的な大衆芸能として定着していたことが窺い知れる。

＊25 James, *op. cit*., p.47

＊26 *ibid*., p.54

＊27 *ibid*., p.55

＊28 *ibid*., p.61

＊29 *ibid*., p.52

＊30 *ibid*., p.52

＊31 *ibid*., p.52

＊32 *ibid*., p.52

＊33 *ibid*., p.52

＊34 *ibid*., p.77

＊35 「文学」についての種々の定義が現在のような形をとり始めたのは，実のところロマンティシズム以降のことである。そして，「文学」という言葉の中に現代的な意味が発生したのは19世紀なのだと言って良い。「象徴」はロマン派文学における解決の糸口であり，Winterbourneはこうした象徴や徴候をDaisyの顔やtoneに探していたのである。

＊36 Edgar Allan Poeは，個性的な探偵Dupinが登場することで世界最初の探偵物と呼ばれる“The Murders in the Rue Morgue”(1841)や，暗号解読と宝探しの傑作“The Gold Bug”(1841)，異常心理と怪奇の物語“The Black Cat”(1843)など，多くの推理小説を書いたが，彼の真の目的は，何らかの問いかけに対して何らかの解答をする，すなわち何かを「解決」することではなく，むしろ曖昧にすることであり，混沌の中における「魂の恐怖」を描くことであった。

A Wonder from the Hero's Point of View

—Various Encounters at the beginning of *Daisy Miller*—

Nobumoto IRIE

(Received October 31, 1996)

ABSTRACT

The purpose of this thesis is to analyze the beginning of *Daisy Miller*, one of the leading novels of Henry James, and to examine the feature of the hero's point of view in the book. James's intension in the book is to set up various "questionings" through the hero's dualistic point of view. The hero Winterbourne, the young exile from America, observes Daisy's repetitive behavior from dualistic point of view. The materials for his judgment are her complexion and tone. He is embarrassed by her constantly moving part beyond his comprehension. And he arranges it to his own convenience, and rebuilds it within his understanding. What leaves her out is not only European scenery or its exclusive society, but Winterbourne's egotistic eyes. His point of view does not change or develop throughout the story. But the important point in the book is not the plot itself, but the "questioning" of the hero, how the hero amplifies his wonder through his repetitive action.

KEY WORDS

Questioning, Binary Opposition, Dualism, Point of View or Eyes, Complexion, Tone